

n 次方程式の n 個の解の k 乗の和の求め方について

1 はじめに

問題解法代数学辞典 (参考文献) の第 8 編 方程式の理論 第 3 章 四次方程式及び高次方程式 6. その他に, 次の問題と解答が掲載されている。

3051. ある四次方程式の四つの根の 1 乗, 2 乗, 3 乗, 4 乗の和がそれぞれ u_1, u_2, u_3, u_4 であるという。この方程式を求めよ。

解 求める四次方程式を $f(x) = x^4 + px^3 + qx^2 + rx + s = 0$

とすれば, 微分を用いて $\frac{xf'(x)}{f(x)} = \frac{4x^4 + 3px^3 + 2qx^2 + rx}{x^4 + px^3 + qx^2 + rx + s}$

そこで普通の割り算をすれば

$$4 - \frac{p}{x} + \frac{p^2 - 2q}{x^2} + \frac{-p^3 + 3pq - 3r}{x^3} + \frac{p^4 - 4p^2q + 4pr + 2q^2 - 4s}{x^4} + \dots$$

$$\therefore u_1 = -p$$

$$u_2 = p^2 - 2q$$

$$u_3 = -p^3 + 3pq - 3r$$

$$u_4 = p^4 - 4p^2q + 4pr + 2q^2 - 4s$$

$$\therefore p = -u_1$$

$$q = \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2)$$

$$r = \frac{1}{6}(-u_1^3 + 3u_1u_2 - 2u_3)$$

$$s = \frac{1}{24}(u_1^4 - 6u_1^2u_2 + 8u_1u_3 + 3u_2^2 - 6u_4)$$

故に求める四次方程式は

$$x^4 - u_1x^3 + \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2)x^2 + \frac{1}{6}(-u_1^3 + 3u_1u_2 - 2u_3)x + \frac{1}{24}(u_1^4 - 6u_1^2u_2 + 8u_1u_3 + 3u_2^2 - 6u_4) = 0$$

2 証明

上の解答に使用されている

$$\begin{aligned} \frac{xf'(x)}{f(x)} &= \frac{4x^4 + 3px^3 + 2qx^2 + rx}{x^4 + px^3 + qx^2 + rx + s} \\ &= 4 - \frac{p}{x} + \frac{p^2 - 2q}{x^2} + \frac{3pq - 3r - p^3}{x^3} + \frac{4pr + 2q^2 - 4p^2q + p^4 - 4s}{x^4} + \dots \\ &= u_0 + \frac{u_1}{x} + \frac{u_2}{x^2} + \frac{u_3}{x^3} + \dots \end{aligned}$$

の証明を試みたい。ただし, u_k は 4 次方程式の 4 個の解の k 乗の和を表す。

n 次方程式 $f(x)=0$ の n 個の解の k 乗の和を u_k とおくと, $\frac{xf'(x)}{f(x)} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{u_k}{x^k}$ である。

証 n 次方程式 $f(x)=0$ の n 個の解 $\alpha_i (i=1,2,\dots,n)$ の k 乗の和を u_k とおく。

すなわち, $u_k = \alpha_1^k + \alpha_2^k + \dots + \alpha_n^k$

$a \neq 0$ として, $f(x) = a(x-\alpha_1)(x-\alpha_2)\dots(x-\alpha_n)$ とおける。

両辺の絶対値をとってから対数をとると,

$$\log|f(x)| = \log|a| + \sum_{i=1}^n \log|x-\alpha_i|$$

両辺を x で微分すると,

$$\frac{f'(x)}{f(x)} = \sum_{i=1}^n \frac{1}{x-\alpha_i}$$

両辺に x を掛けると,

$$\frac{xf'(x)}{f(x)} = \sum_{i=1}^n \frac{x}{x-\alpha_i} = \sum_{i=1}^n \frac{1}{1-\frac{\alpha_i}{x}} \dots \textcircled{1}$$

$\max\left(\left|\frac{\alpha_1}{x}\right|, \left|\frac{\alpha_2}{x}\right|, \dots, \left|\frac{\alpha_n}{x}\right|\right) < 1$ なる十分大きい x に対して (*), ①の右辺は,

$$\begin{aligned} &= \sum_{i=1}^n \left(1 + \frac{\alpha_i}{x} + \frac{\alpha_i^2}{x^2} + \dots\right) \\ &= \left(1 + \frac{\alpha_1}{x} + \frac{\alpha_1^2}{x^2} + \dots\right) + \left(1 + \frac{\alpha_2}{x} + \frac{\alpha_2^2}{x^2} + \dots\right) + \dots + \left(1 + \frac{\alpha_n}{x} + \frac{\alpha_n^2}{x^2} + \dots\right) \\ &= u_0 + \frac{u_1}{x} + \frac{u_2}{x^2} + \dots \end{aligned}$$

$$\therefore \frac{xf'(x)}{f(x)} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{u_k}{x^k} \quad (\text{公式}) \quad \boxed{\text{終証}}$$

3 2の公式の利用例

n 次方程式の n 個の解の k 乗の和の求め方について, k の値が $k=2,3$ くらいまでなら, 対称式を利用するのが一般的で, それ以上になると漸化式を利用する求め方も知られている。しかし, 次の例題なら, 上の公式を使うと単純計算で求めることができる。

【例1】 4次方程式 $x^4 + 4x^3 + x^2 + x + 1 = 0$ の4つの解の10乗の和を求めよ。

解 $f(x) = x^4 + 4x^3 + x^2 + x + 1$ とおくと, $\frac{xf'(x)}{f(x)} = \frac{4x^4 + 12x^3 + 2x^2 + x}{x^4 + 4x^3 + x^2 + x + 1}$

分母, 分子の多項式の各係数を掃き出し, 次の単純計算をする。

4	-4	14	-55	206	-779	2951	-11176	42326	-160300	607099
1	4	12	2	1	0					
4	16	4	4							
	-4	-2	-3	-4						
	-4	-16	-4	-4	-4					
	14	1	0	4						
	14	56	14	14	14					
		-55	-14	-10	-14					
		-55	-220	-55	-55	-55				
		206	45	41	55					
		206	824	206	206	206				
		-779	-165	-151	-206					
	-779	-3116	-779	-779	-779	-779				
	2951	628	573	779						
	2951	11804	2951	2951	2951	2951				
		-11176	-2378	-2172	-2951					
	-11176	-44704	-11176	-11176	-11176	-11176				
		42326	9004	8225	11176					
	42326	169304	42326	42326	42326	42326				
		-160300	-34101	-31150	-42326					
	-160300	-641200	-160300	-160300	-160300	-160300	-160300			
		607099	129150	117974	160300					

よって、4つの解の10乗の和は、607099 ... 答

【例2】ある n 次方程式の n 個の解の1乗, 2乗, \dots , n 乗の和を, それぞれ u_1, u_2, \dots, u_n とする。
 $n=2, n=3, n=4, n=5, n=6$ のとき, この方程式をそれぞれ求めよ。

※ $n=4$ のとき, 冒頭の問題3051である。

解 公式 $\frac{xf'(x)}{f(x)} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{u_k}{x^k}$ を使って, 順次計算すると,

$n=2$ のとき

$$x^2 - u_1x + \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2) = 0$$

$n=3$ のとき

$$x^3 - u_1x^2 + \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2)x + \frac{1}{6}(-u_1^3 + 3u_1u_2 - 2u_3) = 0$$

$n=4$ のとき

$$x^4 - u_1x^3 + \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2)x^2 + \frac{1}{6}(-u_1^3 + 3u_1u_2 - 2u_3)x + \frac{1}{24}(u_1^4 - 6u_1^2u_2 + 8u_1u_3 + 3u_2^2 - 6u_4) = 0$$

$n=5$ のとき

$$x^5 - u_1x^4 + \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2)x^3 + \frac{1}{6}(-u_1^3 + 3u_1u_2 - 2u_3)x^2 + \frac{1}{24}(u_1^4 - 6u_1^2u_2 + 8u_1u_3 + 3u_2^2 - 6u_4)x + \frac{1}{120}(-u_1^5 + 10u_1^3u_2 - 20u_1^2u_3 - 15u_1u_2^2 + 30u_1u_4 + 20u_2u_3 - 24u_5) = 0$$

$n=6$ のとき

$$x^6 - u_1x^5 + \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2)x^4 + \frac{1}{6}(-u_1^3 + 3u_1u_2 - 2u_3)x^3 + \frac{1}{24}(u_1^4 - 6u_1^2u_2 + 8u_1u_3 + 3u_2^2 - 6u_4)x^2 + \frac{1}{120}(-u_1^5 + 10u_1^3u_2 - 20u_1^2u_3 - 15u_1u_2^2 + 30u_1u_4 + 20u_2u_3 - 24u_5)x + \frac{1}{720}(u_1^6 - 15u_1^4u_2 + 40u_1^3u_3 + 45u_1^2u_2^2 - 90u_1^2u_4 - 120u_1u_2u_3 + 144u_1u_5 - 15u_2^3 + 40u_3^2 + 90u_2u_4 - 120u_6) = 0$$

※この結果から分かることは, n 次方程式の係数は, x^n の係数を1としたとき, 順に

$$\begin{aligned}
& 1, -u_1, \frac{1}{2}(u_1^2 - u_2), \frac{1}{6}(-u_1^3 + 3u_1u_2 - 2u_3), \frac{1}{24}(u_1^4 - 6u_1^2u_2 + 8u_1u_3 + 3u_2^2 - 6u_4), \\
& \frac{1}{120}(-u_1^5 + 10u_1^3u_2 - 20u_1^2u_3 - 15u_1u_2^2 + 30u_1u_4 + 20u_2u_3 - 24u_5), \\
& \frac{1}{720}(u_1^6 - 15u_1^4u_2 + 40u_1^3u_3 + 45u_1^2u_2^2 - 90u_1^2u_4 - 120u_1u_2u_3 + 144u_1u_5 - 15u_2^3 + 40u_3^2 + 90u_2u_4 \\
& - 120u_6), \dots
\end{aligned}$$

であるということ。

4 補足

(※) の部分で, $f(x) = a(x^n + a_1x^{n-1} + a_2x^{n-2} + \dots + a_{n-1}x + a_n) = 0$ の 1 つの解を α とするとき, $|\alpha| < \max(|a_1|, |a_2|, \dots, |a_n|) + 1$ が成り立つことを証明する。

これが証明されると, $\frac{xf'(x)}{f(x)} = \sum_{k=0}^{\infty} \frac{u_k}{x^k}$ は実際, $|x| > \max(|a_1|, |a_2|, \dots, |a_n|) + 1$ なる x で成り立つことに

なる。

証 $\max(|a_1|, |a_2|, \dots, |a_n|) = m$ とおくと, 題意より, $m > 0$ である。

今, $|\alpha| \geq m + 1 \dots \textcircled{1}$ と仮定する。

$$x^n + a_1x^{n-1} + a_2x^{n-2} + \dots + a_{n-1}x + a_n = 0 \text{ より,}$$

$$x^n = -a_1x^{n-1} - a_2x^{n-2} - \dots - a_{n-1}x - a_n$$

両辺の絶対値をとり, $x = \alpha$ を代入すると,

$$|\alpha|^n = |-a_1\alpha^{n-1} - a_2\alpha^{n-2} - \dots - a_{n-1}\alpha - a_n| \leq |a_1|\alpha^{n-1} + |a_2|\alpha^{n-2} + \dots + |a_{n-1}|\alpha + |a_n|$$

$$\leq m(|\alpha|^{n-1} + |\alpha|^{n-2} + \dots + |\alpha| + 1) \quad \because |\alpha_1| \leq m, |\alpha_2| \leq m, \dots, |\alpha_n| \leq m \text{ より}$$

$$= \frac{m(|\alpha|^n - 1)}{|\alpha| - 1} \leq \frac{m(|\alpha|^n - 1)}{m} \quad \because \textcircled{1} \text{ より, } |\alpha| - 1 \geq m > 0, |\alpha| > 1 \text{ であるから}$$

$$= |\alpha|^n - 1$$

よって, $|\alpha|^n \leq |\alpha|^n - 1$ となり, この不合理は $\textcircled{1}$ の仮定が原因である。

従って, $|\alpha| < \max(|a_1|, |a_2|, \dots, |a_n|) + 1$ **終証**

5 おわりに

本校の図書館の蔵書に, 問題解法代数学辞典(上/下)第2版があるが, 「上巻 第7章 方程式の理論」の中に, 最初に紹介した問題3051に相当する問題が見当たらない。なぜ, 第2版のときに削除されたかは不明である。

しかし, n 次方程式の n 個の解の k 乗の和を求める方法に微分を使う方法があることはおもしろいと思いい, 今回の原稿にしました。

なお, 今回の原稿は, 第44回数実研(2003年2月1日)で発表したときの資料の改訂版である。

【参考文献】

- [1] 問題解法代数学辞典(笹部貞市郎著, 昭和45年5月1日初版第27刷, 聖文社, 定価3,500円)
- [2] 時岡郁夫の Website (<http://www.phoenix-c.or.jp/~tokioka/>) こだわり数学 11